

氏 名 伊藤 まり子

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1467 号

学位授与の日付 平成 24 年 3 月 23 日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 カオダイ教ハノイ聖室の民族誌的研究—ベトナム北部地域の都市における女性たちの社会関係—

論文審査委員 主 査 准教授 三尾 稔
教授 田村 克己
教授 鈴木 七美
准教授 宮沢 千尋 南山大学
准教授 櫻永 真佐夫 国立民族学博物館

論文内容の要旨

ベトナム社会主義共和国の首都ハノイにおいて、ある小さな宗教組織が活動している。1937年に創設されたその組織の現在の構成員は、主に高齢の女性たちである。彼女たちは、組織所有の宗教施設を定期的に訪れ、儀礼などの活動をおこなっている。

本論文は、この女性たちが、宗教施設に集い、そこでさまざまな活動に参加することをつうじて、どのような関係をいかに構築しているのか、またその関係が、ベトナム北部地域の都市に生きる彼女たちにとって、どのような意味をもつのかを考察しようとするものである。

本論文は、全7章から構成される。序論では、村落研究を基盤として進展してきたこれまでのベトナム社会研究を、北部地域村落の社会構造に関する研究、モラル・エコノミー論、ドイモイ以降のベトナム社会研究、そしてベトナム女性をめぐる研究の4つの視点にわけて整理した。そして、従来のベトナム社会研究が、村落やそこでの規定の価値観に埋め込まれたなかにある個人を、あるいはそれを基盤としながら新たな価値観を生成する個人を前提にして議論されてきたことを指摘し、本論文が、そこからこぼれおちた女性たちの存在とその関係を捉えなおす試みであることを述べた。

それをふまえて、第1章では、ハノイ聖室という場が、フランス植民地期末期の1930年代から、北部地域の社会主義化とその後のベトナム戦争を経て、1986年に施行されたドイモイ政策による社会経済的な発展をむかえたベトナムの歴史的変遷のなかで、都市化と政治化によって特徴づけられていくプロセスを描いた。

第2章では、はじめに、現在のハノイ聖室の施設、信徒たちの組織体系および活動内容の3点を概観し、その後、ハノイ聖室に集う女性たちの社会的特徴について言及した。

続く第3章から第5章では、ハノイ聖室に集う女性たちの関係について具体的に述べていった。その際に注目したのがホ・ダオとダオ・ミンという二つの言葉であった。

第3章では、代表者のホアが頻繁に言及するホ・ダオという言葉を取りあげた。ホ・ダオとは、信徒を特定の集団として括る教義上の概念であり、地理的な区分にしたがった「教区」という意味にくわえて、擬似的な家族共同体としての意味も含意していた。教義によると、ホ・ダオに所属する成員としての信徒は、活動基盤となるそれぞれの地域の規範に反しないような活動を維持することが言及されており、ホ・ダオに帰属する信徒個々人は、それぞれの地域内の規範を守りつつ、カオダイ教の宗教的活動に参加し、ホ・ダオとしてのコミュニティをかたちづくってきた可能性があった。

他方、都市への移住者によって構成されるハノイ聖室では、一定の地域社会の背景がなく、代表者ホア個人の思考様式が作用するなかで信徒たちの行為の統制がとられていた。彼女はそれをカオダイ教の「修行」として語ることで、信徒たち個々人の行為を規定し、それをつうじて、信徒たちが聖室という「家」に集い、ホアのダオ観念にしたがった「修行」につとめながら、相互に敬意を示し配慮しあう関係としての理想的なホ・ダオの形成を目指していた。

しかし、在家信徒たちは、ホアが語る理想上のホ・ダオに対して積極的にくみしているわけではなく、ホアと在家信徒たちのあいだには、軋轢が生じはじめていた。

第4章では、在家信徒たちがハノイ聖室を介した宗教的行為を言及する際に使うダオ・

ミンという言葉に着目した。ダオ・ミンは、「私・私たちの道（方法 / 信仰）」を意味する。それは、信徒たちが、信徒たちの社会的文脈に即したなかで解釈しているカオダイ教の「修行」をさし示していた。

信徒たちがダオ・ミンと表す宗教的行為は、彼らをカオダイ教信徒として徴しづける行為と積徳行為の二つに大別されるが、彼らは、これらの宗教的行為に関して、「修行」を可視的に理解するための行為や型、ないしそれに関連する知識の理解をより重視していた。また、そうした行為や型とそれに関する知識は、信徒間で厳格な統一が図られているわけではなく、多少の逸脱があったとしても信徒間の相互の関係内で許容される傾向もあった。ここでは、ハノイ聖室の在家信徒たちが、信徒同士の関係内において、差異のあるかたちで共有された知識を実践し、「私・私たちの道（方法 / 信仰）」としてのダオ・ミンを編成していることを指摘した。

第 5 章では、ダオ・ミンを表すさまざまな宗教的行為が顕在化する儀礼をとりあげ、なかでも在家女性たちがとりわけ重視する「仏母礼」と死者儀礼について論じた。「仏母礼」とは、ベトナム一般の女神信仰を背景とする儀礼であり、死者儀礼とともに多くの儀礼が参加する。女性たちは、儀礼を通じて、特定の他者と場を共有し、行為を共同する機会をえていた。さらに、彼女たちは、それを通じて経験やそれにともない生じた感情をも共有していくなかで、親密な相互行為を展開していた。とりわけ聖室活動を支える中心メンバーの女性たちは、儀礼を介した活動の過程で親密な相互行為を繰り返しながら、そこでの関係を再編していることを指摘した。

終章では、本論文の記述を通じて明らかになった、以下の 4 点を指摘した。

一つ目は、ハノイの歴史的変遷のなかで形成されてきたハノイ聖室という場が、都市化と政治化によって特徴づけられる点である。

二つ目は、現在のハノイ聖室には、出身村落からハノイという都市に移住した背景をもち、また未婚者、離婚経験者や戦争寡婦、あるいは子どもの夭折や自身の病気など、人生の一時期においてなんらかの「困難さ」を経験している女性が多く参加している点である。

三つ目は、現在のハノイ聖室の活動は、代表者個人の思考様式に強く影響されながらも、実際には、在家信徒個々人の実践によって展開している点である。

四つ目には、在家信徒たちは、ハノイ聖室の活動を介した場の共有や行為の共同を通じて、相互に親密な関係を形成している点である。そしてこのことから、ハノイ聖室とそこに集う女性たちの関係を、「実践コミュニティ」の視点で捉えることの可能性を指摘した。レイブとウェンガーによって提示された「実践コミュニティ」の概念とは[レイブ・ウェンガー 1993]、ある集団への新規参加者が、そこへの「参加」という実践を通じて、技能や知識を学習していく場をさす。現代のハノイ聖室では、女性たちが、自己と特定の他者とのあいだで繰り返される行為と対話から生起する相互行為を展開し、比較的対等な関係を再編させていた。今後は、ハノイ聖室に集う女性たちを、実践コミュニティの視点から検討しなおすことで、女性間の関係の精緻な分析が可能となることが考えられる。

本論文は、ベトナムの首都ハノイにおいて 1937 年から活動を続けているベトナムの新宗教カオダイ教の支部（ハノイ聖室）に集う女性たちが、聖室のさまざまな活動に参加することを通じて、指導者や信者たちの関係構築のあり方や、その関係がハノイという都市に生きる彼女たちにとってもつ意味を考察しようとするものである。論文の基礎となるデータは申請者が 10 年近くにわたって行ってきた社会人類学的なフィールド調査によるオリジナルな資料に基づいている。

論文は全部で 7 章から構成される。序論では、村落研究を基盤として進展してきたこれまでのベトナム社会研究を、北部地域村落の社会構造に関する研究、モラル・エコノミー論、ドイモイ以降のベトナム社会研究、及びベトナム女性をめぐる研究の 4 つの視点にわけて概観している。そして、従来の研究が、村落を基盤に生成された価値観に埋め込まれた個人を前提とし、基本的には階層的な社会関係によって特徴づけられるものとしてベトナム社会を捉えてきたことを指摘する。これに対して本論文は、そこからこぼれおちた女性たちの存在に注目し、彼女たちの築く平等的なネットワーク関係の側面からベトナム社会を捉えなおす試みと位置づけられる。

序論に続く第 1 章では、フランス植民地期末期の 1930 年代から、北部地域の社会主義化とその後のベトナム戦争を経て、1986 年に施行されたドイモイ政策による社会経済的な発展というベトナムの近現代史のなかで、ハノイ聖室という場が都市的な性質を持つと同時に、共産党政権の本拠地においてカオダイ教を代表する支部という政治的特徴を有するに至るプロセスを描く。さらに第 2 章では、ハノイ聖室の施設、組織体系および活動内容の 3 点を概観し、同聖室に集う信者の社会的特徴を考察している。同聖室には女性信者が際立って多く、その多くは出身村落からハノイという都市に移住した背景をもち、さらに人生の一時期においてなんらかの困難を経験している。ハノイ聖室は、このような女性たちが親密な関係を維持し、困難な生を乗り越えていくための場となっているのである。

第 3 章から第 5 章では、ホ・ダオとダオ・ミンという民俗的宗教的概念に注目しつつ、ハノイ聖室における宗教的行為が詳細に記述され、女性たちの社会関係のダイナミズムが考察される。

すなわち、第 3 章ではハノイ聖室のリーダーである出家した高齢女性の視点から見た聖室におけるあるべき行為や社会関係の態様が描かれ、それがホ・ダオ（第一義的には宗教組織の末端の信者集団）という概念が含意する家族的な共同体の形成を目指すものであることが述べられる。

一方、在家信者たちは、リーダーが理想とする統制的な秩序に基づくホ・ダオ像に積極的にくみしているわけではない。第 4 章と第 5 章では、女性在家信者がホ・ダオに対置して使うダオ・ミンという概念に着目し、彼女たちの求める聖室内の社会関係のあり方が探られる。「私・私たちの道（方法 / 信仰）」を意味するダオ・ミンにおいては、修行を可視的に理解するための行為や型、またそれに関連する知識の理解が重視され、その内容の多少の逸脱は信者間で許容される傾向がある。ハノイ聖室の在家信者は、相互に平等で親密な関係のなかで、自らの文脈に即して解釈した独自の方法や信仰としてのダオ・ミンを実行している。そして、ダオ・ミン的な宗教的行為が顕在化する儀礼を通じて、彼女たちが

さまざまな経験や感情をも共有し、親密な関係を構築してゆくことが明らかにされている。

結論にあたる終章では、女性在家信者が、聖室で繰り返される行為と対話に基づき、比較的対等で親密な関係を築いていることを述べ、その社会関係の特徴が実践コミュニティの議論につながる可能性を展望している。そして、その宗教的実践は、ベトナム社会の周辺に位置づけられる困難な境遇にある女性たちが、伝統的な共同体とは異なる新しい結合原則に基づくコミュニティを都市において形成するための基礎となっていることを指摘する。

政治的な理由によって、ベトナム社会、特に新宗教の教団組織における人類学的なフィールド調査は極めて困難な状態にある。しかし、申請者はこの困難を乗り越えてカオダイ教研究に果敢に取り組み、長期間の調査によって調査対象者との信頼関係を築いて聖室の日常生活と宗教活動の実態を明らかにしている。聖室は教団組織の一部として存在は知られていたが、その実態に関する詳しい記述は世界的に見てもこれまで類例がない。これらの点から本論文はベトナムの社会人類学研究において新たなテーマを開拓した先駆的研究と高く評価できる。

論文の記述は信者に密着した視点が貫かれていて、ホ・ダオ、ダオ・ミンなど信者らが自らの信仰を捉える内在的な概念や実践が詳細に描かれ、聖室内の動的な社会関係の抽出に成功している。特に村落共同体的な規範に根差して維持・発展してきたカオダイ教の組織原理が、都市的な状況にいかに応用されているのか、また在家女性信者が正統的な教義や規範と交渉しながら独自の宗教実践やその解釈を生み出して、都市においていかに親密な社会空間を形成しているのかといった諸点を明らかにしたところに、本論文の社会人類学への貢献が認められる。

ただし、調査上の制約からより広い都市社会における聖室の位置づけが必ずしも十分に探究できなかった点や、信者たちの親密さを捉えるタームについて他の民俗的語彙との連関の中でさらなる吟味が求められる点などに若干の不満が残る。しかし、これらはむしろ今後の研究の更なる発展のための手がかりとすべき点である。

本論文の貢献はベトナムの社会人類学的研究に対するものだけにとどまらない。カオダイ教やハノイ聖室のベトナム近現代史における位置づけが適切に考察されている点は、ベトナムの社会史や宗教史の研究において評価に値する。一方、比較文化研究の視点からも、グローバリゼーションや移動を経験する現代社会に生きる人々のウェルビーイング（より良き生）がいかにして達成されるのかという問題関心に対して、ベトナム都市社会の一地点への注目に基づいて豊かな民族誌的事例を提供するものと評価できる。

以上を総合し、審査委員会は全員一致で本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。